

寒橋

山本周五郎

青空文庫

お孝^{こう}はときどき自分が恥ずかしくなる。鏡に向つているときな
ど特にそうだ。

「——まあいやだ、いやあねえ」

独りでそんなことを呟^{つぶや}いて、独りで赤くなつて、鏡に写つてい
る自分の顔を、一種の峻^{そそ}られるような気持で、こくめに眺めま
わす。全般的に見て、いやな言葉だけでも、膏^{あぶら}がのつてきてい
る。皮膚^{くわい}が透^すけるようなくあいで、なにかの花びらのように柔ら
かくしつとりと湿つていて、撫^なでると指へ吸いつくような感じで

ある。

或る気分としては眼をそらしたい。良人おっとというものをもつて半年あまりになるが、そのあいだに自分の軀からだにあらわれた変化は、これには自分としても銜てれて、頬の熱くなることがしばしばあった。

——いやあねえ。

こう思うのはそのままの実感である。胸乳むなちちのたつぷりした重さ、腰まわりのいっぱいな緊張感、痛いほど張った太腿ふともも。そのくせ胴は細く緊つて、手足も先端にゆくほどすんなりと細い。その膏の乗つて肥えた部分と、反対に細く緊つた部分との対比が、娘時代とはあきらかに違ったもので、つい頬が熱くなり、眼をそらし

たくなるが、じっさいは胸がどきどきし、唆られるようなふしぎな気持で、いつまでも眺め飽かないのであった。

「——ふしぎだわ、女の軀つて、……どうしてかしら、ほんとにいやだわ」

いやだと云いながら、しかも一方では、いくら眺めても眺め飽きないのである。

「——なにをしているんだ、またそんな恰好で、肌をいれたらどうだ、風邪をひくじゃないか」

父親に叱られて、はつとして、そのくせ自分でもわざとらしいほどおちついたすましようで、ゆつくりと着物の袖へ手を入れる。毎々のことだがこれもじつは恥ずかしい。母親がはやく亡くなっ

たせいだろう、まえには父親のほうで気にして、髪結いにゆけとか、おしろい白粉のは刷きかたがぞんざいだとかよく云われたものだ。

——母親がいないと娘はじじむさくなるって、世間ですぐに云われるんだから、……いつそ白粉をつけないならつけない、つけるなら娘らしくちやんとつけるがいい。

——今日はこれでいいのよ、今日は白粉ののりが悪いんだもの……それに天気がこんなでくさくさしているのよ、こんな、……白粉なんかどっちでもいいわ。

——それじゃあ済まないんだ、女の髪化粧というものは世の中の飾りといつてもいいくらいで、うす汚ないす髷うらだなえたような裏店でも、きれいに髪化粧をした女がとおれば眼のたのしみになる、

……いつときその體えたような裏店が華やいでみえる、……つまり春になつて花が咲くように、世の中の飾りの一つになるんだ、……化粧をするんならそのくらいの気持でするがいい、おまえのは自分本位で、そういう気持はなおさなければいけない。

この種の問答が幾たびかあつた。

——まあいやだ、世間の飾りだとか人の眼をたのしませるなんて、あたし聞くだけでも胸がむかむかするわ。

お孝は謙うそのないところこう思つていた。それが時ときぞう三を婿にとつてから變つた。父親の云つたことは本当らしい、髪をいじり化粧をするとき、ふと気がつくとき三の眼で自分の髪かたちや化粧の効果をみている。時三はむくちでなにも云わないが、髪化粧が

氣にいったときはほうという眼つきをする。

——あぎやかだね、眼がさめるようだね。

そんなふう云っているのがわかる。くち上手な者の百千言よりも、良人のそういう眼つきのほうが含みがあつてよほどうれしい。またおたみを伴つれて買い物に出るときなども、人に振返つて見られたりすると張合があつた。……むすめ時代には自分の縹きりよにひかれるのだと思つて、いやでないまでも愉快的気分にはなれなかつた。しかし今では自分が誰かの眼をたのしませるといふことが、或る程度まで逆に自分をたのしくさせるようになった。そんなこともしぜん化粧が念入りになつた原因かもしれない。

——げんきんなものだ。

父親がそう思っているような感じである。気の勝ったお孝には恥ずかしいが、いろいろな面で云つて恥ずかしいが、どうしたつて鏡に向うことが多いし、その時間が長くなるのは、これは自分でもいまさらどうにもならない。——春が来て花が咲くようなもんだもの、いいじゃないの。などといつそ肚を据えたかたちであった。

「どうするの、お父とつつあん、夜釣りにゆくんならお弁当のしたくをするけれど」

「——時三はあした休みじゃあないのか」

「いやよ、あしたは六間堀けんぼりへ菊見にゆくんですもの、釣りになんぞさそいだしちやだめよ」

「——まるつきり独り占めだ」

「いいじゃないの夫婦ですもの、お父つあんの御亭主じやあるまいし、……その代り今夜はおいしい物をおごつてあげるわ、お父つあんの大好きなおいしい物、ね、いいでしょ」

二

本所ほんじよ六間堀と森下もりしたにまたがつて、植辰うえたつという大きな植木屋がある。そのころ菊は染井というのが一般的であつたが、数年まえから植辰でも力みだして、一種の風格ある花壇を作つて展観させた。大輪とか変り咲きとか懸崖けんがいなどの、人工の加わつたも

のは少ない、ごくありきたりの種類をごく怠慢にそだてたふうである。その方面に眼のない者は多少失望した。出来そくないだなどど放言する者もあつた。けれども文人雅客とか幾らかひねつた趣向を好む人々は、つまり具眼の士は感服した。

——野のふぜいですな、よくうつしましたな、どうもなんとも云えぬふぜいですな。

——菊はこう作るのが本筋である、乱菊、これが自然である、染井のなどは邪道であつて、あれなどは花を片輪にしたものである、おれとしてはこれなら飲める。

菊を飲むわけではない。菊をさかなにして酒をやろうというのである。そこで植辰がわでは花壇の要所とおぼしき処々へ茶店を

設けた。そのうちに四つ五つ小座敷のあるのも建て、そこではちよいとした女などもいるし、きどったような料理などもできる。……お孝は時三といっしょにその茶屋のひと間を借りて、持って来た重箱を開いたり、またその家の料理など注文したりして、二人で菊を眺めながら半日を過した。

「あたしこのごろ死ぬのがこわくてしようがないの、ねえ、あんなそう思わなくって」

「——軀のぐあいでも悪いのか」

「そうじゃないの、死ねばあんたと別れ別れにならなくちやならない、顔も見られないし話もできなくなるわ、そう思うと死ぬのがこわくてこわくて、胸のこころへんに固い石のような物が詰っ

てくるのよ」

「——だっていつかは、……そいつばかりはしようがないだろう」
「だからそう思うの、いつかは死ぬんだから、せめて生きている
あいだ、生きてこうしているあいだだけは、紙一重の隙もない夫
婦でくらしたい、これまでのどの御夫婦にもできなかつたくらい
に、……あたしあんたにできるだけのことをするわ、ねえ」

お孝は良人の膝を片方ひざの手で、上から強く押しつけながら、じ
つとながし眼に見あげた。

「身も心もあんたの思いのままよ、あんたのためならどんなこと
でもしてあげてよ、ねえ、だからあんたもいつまでも変らないで
あたしを可愛がってね、よそのひとに気をひかれたり、あたしに

隠れて浮気なんか決してしないでね、ねえ、よくって」

「——私にはそんなはたらきはないらしい、だいいち先方で相手にしないよ」

「うそうそ、あんたにはおんな好きのするところがあるわ、あんたを見ているとなにか世話をしたくなるの、男ぶりだけじゃなくひとがらがそうなんだわ、おたみだってあんたを見るときの眼つきはべつなんだもの」

「——ばかなことを」

時三は眉をしかめ、顔をそむけた。

「あら本当よ、まきちよう榎町にいたじぶんだって、近所の娘さんたちに騒がれたってこと知ってるわ、うたざわ歌沢のお師匠さんのことだつ

て、……いやよあだし、これからもしそんなことがあつたらあだし生きちやいないわ、ねえ、いいこと」

「——いつたいどうしたんだ、今日は」

時三はこんどは不審そうにお孝を見た。

「——へんなことばかり云つて、本当にどこかぐあいでも悪いんじゃないのか」

「ぐあいなんか悪くはないわ、それにちつともへんなことなんて云やしなくつてよ、あんたにはあたしの気持がわからないからそんなふうに聞えるんだわ、そうよ、あたしのことなんて、……あなたはちつとも思つて呉れてやしないんだわ」

「ばかなことばかり云つて、わけがわからない」

こう云いかけるまにお孝は袂たもとで顔を推えて、時三の膝へ泣き伏してしまった。もちろん悲しいのではない、むやみに切ないようなもどかしいような気持で、泣いてしまうよりほかに自分で自分の始末がつかかなかつたのである。

結婚してから約半年めのその日が、お孝の気持にかなりはつきりと一種の転機を与えた。それは良人が自分にとって絶対にかげがえのないひとだということ、もし良人がよその女に心をうつしでもしたら、本当に自分は死んでしまうだろうということであった。……結婚した女ならそう思わない者はないだろう、ごく普遍的な感情であるが、お孝のばあいはそれがやや極端であった。

下町そだちはいったいにませるものだが、お孝は珍しいくらい

おくで、その年の三月、二十歳で時三を迎えるまで男などに気をひかれた覚えは殆んどなかった。家は三代続いた袋物商で、うねめ采女町ちようの「田村」といえば一流の店でおつていた。田村から出て店を持ったものが七軒あり、これをたなうちといって、親類同様にでいりしているが、この人たちがはやくからお孝に縁談をもちだしてきた。それはお孝がひとり娘だからどうせ婿を取らなければならぬ、ほんだな「本店」がおちつかないとたなうちも安心できないという公式論であった。……その裏には「本店」をめぐる親類やたなうちの、一種の競争のようなものもあつたらしいが、それはべつとして、お孝もうすうす感じていたのは、父親の伊兵衛の問題であつた。

お孝の母はいねといつて、お孝の九つの年に亡くなつたが、家
つきの娘で、伊兵衛は店で育つて婿になおつたのである。いねは
お孝よりずっときりよう縹緞よしだった。なにがしかいうえぞうしや絵草紙屋が、
一枚絵にしたいと云つて交渉に来たこともあるそうで、これも
ちろん謝絶したが、そのくらいきれいだった代りに軀が弱く、医
者のでいりの絶えることがなかつた。……そんなところから、気
性の知れた温和な、酒も煙草ものめない伊兵衛が選ばれたものら
しい。……予想どおり伊兵衛はいい良人だった。いねはお孝を産
んでから一年の半分は寝ているというふうで、小田原町の大川に
近いこの家も、彼女の療養のために建てられたものであるが、伊
兵衛はその小田原町の家と店とを往復する以外には、横丁へも曲

らないというくらいに、忠実に妻に仕えとおした。

妻が亡くなつてから、当然あとののはなしがいろいろ出た。しかし伊兵衛は柔和にうけながすばかりで、どうしてもあとを貰おうとはしなかつた。……お孝にはやく婿を取らせようという、周囲の人たちの気持には、そうしたあとで伊兵衛を隠居させ、しかるべきのちぞえを持たせようという、含みがあつたのである。

——ねえお父つあん、どうしておつ母^かさんを貰わないの、ねえ、おつ母さん貰つてよ。

十二三のお孝はそんなことをよく云つた。それから暫く経つと、ときわず常磐津やお針の稽古へいつて、そこで聞く世間ばなしが、しばしば男女間の艶^{えん}聞^{ぶん}に属し、ことに男というものが浮気で悪性だと

いう定説になつてゐることを知り、こんどは父親に対する不信と疑惑に苦しめられた。……伊兵衛はその前後から釣り道楽をおぼえて、ときどき夜釣りなどについて朝帰ることがあつた。そんなときお孝はあて推量で、父親がよそに愛人をかこつていて、その人のところへ泊りにゆくに違ひないと思ひ、胸が半分に縮まるよ
うな、呼吸困難に近い苦しい気持ちにおそわれるのであつた。

——ねえ、本当に釣りにいつたの、よそへ泊つたんじやないの、
ねえ、本当に釣りにいつたの。

こんなぐあいにするさく云つて、しまいにはいつしよに付いて
いつたことも幾たびかあつた。伊兵衛はその頃からお孝と小田原
町の家へ移り、飯炊きの老婆と女中を使つて、父娘おやこ二人さし向い

の生活を始めた。……妻と娘とが交代したかたちである。店と小田原町とを往復するほかには、やっぱり横丁へも曲らないといったふうで、夜釣りも近くの寒橋さむさばしのあたりで満足した。

寒橋というのは小田原町から築地明石町つきじあかしちようへ渡したもので、京橋堀と見当堀が大川へおちるおちくちにあつた。汀みぎわに大きな石の

ごろごろした、吹きさらしの、「さむさ橋」という俗称のぴつたりする観景である。……伊兵衛はそこで釣りをした。寒い季節には布子ぬのこを重ねたうえから羅紗らしゃの古いみちゆきを着て、もうろく頭ず巾きんをかぶって、崩れた石垣の上につくねんと糸を垂れている。お孝はそんな恰好をしばしば見にいった。

家から近いので、眠れないときなどは、熱い湯茶を持ってゆき、

父のそばに身を踞めて、暗い大川の水を眺めながら、ながいこと時を過すこともあつた。

—— 軀のぐあいのいいときには、おつ母さんも茶や弁当を持つて来て呉れたもんだ。

伊兵衛はときにそんな話もした。

—— 目黒から来たおとりという女中がいて、それに持たせて来るんだが、……おまえが今そうしているそこんとこに踞んで、いつまでも私の釣るのを見ている、……おとりは眠いさかりだから迷惑なはなしだ、よくいねむりをしたつけ、……そうするとおつ母さんも笑いながら、しかたなしに帰ってゆくんだが、……その笑い声がまだ耳にのこっているようだ。

お孝にもそのようすが見えるようだった。病弱な母と温和で実直な父との、互いに^{いたわ}ぬりをこめた静かな愛情、初冬のやわらかい日ざしのような、透明な暖かい愛情、それがお孝にだんだんとかつてきた。

——お父つあんがあとを貰わないのも、よそに好きな人をつくったり、浮気をしたりしないのも、亡くなつたおつ母さんが忘れられないからだ、二人はそんなにも愛しあつていたんだ。

お孝はそう思った。世間では男は浮気で悪性と定説になつていゝる、そういう事実も見たり聞いたりする。父のような人はおそれく稀^{まれ}だろう、とすれば男なんていやらしい、どんなことがあつても結婚なんかしない。……こんなふうの一つの信条さえもつよう

になった。軀のほうも発育がおそかったらしいが、父親のほかに男などまっぴらという気持だった。

結婚して半年めぐらいからの、良人に対する激しい愛着心は、うがって云えばその反動でもあろう、発育のおくれていた軀や心が、にわかには生き生きと成長し始めたためもある。いずれにせよ、男と女の愛情というものが、身を灼く^やように楽しく、一面にはこんな苦しく哀しいものかということをお孝も自分で体験する時期になったのである。

一年と経ち二年と経った。

時三が来てまる二年めの五月、父の伊兵衛がとつぜん吐血して倒れた。医者は胃に潰瘍かいようが出来たという診たてで、そのまま九月まで寝とおした。この期間ずっと、伊兵衛の世話は女中のおたみが独り占めでやった。まず喰べ物を作るのが手間と時間をくうし、温石を当てるとか胃部を冷やすとか、薬を煎せんじるとか便器のめんどろをみるとか、動くことを禁じられている病人なので、看護にはたいへん手数と努力が必要だった。……お孝も傍観していたわけではない、つとめて世話をしようとするのだが、おたみが先へ先へと奔走するし、当の病人からしておたみにかかりたがった。

「それはおたみにさせるからいい、おまえはそつちにすることがあるんだろう、構わないからそつちのことをして呉れ」

こんなふう云つて、なるべくお孝の手を避けようとした。

「へんねえ、なんだかへんだわ、まさかと思うけれど……どうしたのかしら」

「へんなことはないさ、おまえは私のこともしなくちやあならな
いし、おたみならかかりつきりになれるからさ、……動けない病
人には看病の手の替ることがいちばんいやなものらしいよ」

「それはそうかもしれないけれど、でも……」

お孝は良人とそんなことを話しながら、ひとつ頭にひつかかる
ものがあつた。それは去年おたみに縁談があつて、又とないくら

い良縁だったのをおたみが断わった。……おたみは南千住に家があり、十五の年から奉公に来ている。お孝より一つ下で、気はしもきくし縹緖も悪くない、いわゆるおかめ型のぽっちやりした、軀つきも小柄な愛嬌あいぎようのある娘だった。……それまでも幾たびか縁談があつたが、いつもまだ年が若いからと首を振っていた。——あたし一生お孝さんのそばにいたいんです、お嫁にゆくのならなんかいやなこつてすわ。

こう云い張っていた。しかし去年のときはもう二十にもなるし、断わる理由がどうにもわからなかつたのである。お孝は冗談のよ
うに、

——あんたが好きだからよ。

などと良人に云ったことがある。それには時三が婿に来てから、おたみのようすがどことなくなまめかしくなり、時三になにか云われたりするとふと顔を赤くしたり、またしおのある眼つきでじつと見たりした。……いつか六間堀へ菊見にいったとき、思わずそのことを良人に云って、不愉快そうにそっぽを向かれたことがあるが。……父が病気になつてからのようすを見ると、やはりそこにあたりまえでないものがあるような感じで厭いやだった。

「いいじゃないか、お父つあんが気にいつてるんだから、おたみだつていやいやしているんじゃないし、気を揉もむことはないじゃないか」

「あたしってやきもちやきなのかしら」

「あつさりしているほうじやあなさそうだな」

「——憎らしい、あんたのせいよ」

「またそれか、よく飽きないものさ」

「だって本当なんですもの、あんたといっしょになるまえには夢にもこんな気持は知らなかったわ、こんな気持って、……本当に自分でもいやよ」

あんたのせいよと云う言葉は無根拠ではなかった。時三は日本橋槇町の「松葉屋」という、やはり袋物商をしている家の二男で、男ぶりもいいし職人はだで、近所の娘たちにずいぶん騒がれたというし、稽古にかよっていた歌沢の若い女師匠とは、かなり深いつきあいがあったということを知っている。……もちろん結婚す

るまえにきれいに片がついていたらしいが、いつしよに生活してみると、そういう事実があつたらうということが、お孝にはよくわかつた。

時三は田村へ来てからも、店に坐るよりは仕事をするほうを好んだ。店は他吉という番頭に任せて、自分は一日じゅう仕事場にこもっている。あいそつけはないし口数は少ないし、いつもむつとしたような顔をしているが、そこにちよつと説明のつかない強い魅力があつた。……一手にひきうけて世話をしやりたいたとか、思いつきり虐め^{いじ}てやりたいたとか、薄情なめにあつて泣かされてみたいとか、それぞれ気性によつて違うだらうが、いずれにせよ彼を見ているとなにかかまってみたくなる、要するにほうっておけ

ない気持になる。

——これがおんな好きのするつていう型なんだわ、いちばん危ない型だわ。

お孝は自分の身にしみてそう思った。

結婚してまる二年も経ち、疑わしいようなことはいちどもなかった。良人が誠実であるということは慥たしからしい、嫉妬しつとなどする余地は少しもない。こう安心していながら、一方ではそんな筈がないという気持がぬけず、ついすると良人をうるさがらせ、自分でもいやになるようなことを云ってしまふ。

——みんなあんたのせいよ。

お孝としてはこう云うよりほかに立つ瀬がなかったのである。

四

伊兵衛は九月の下旬にとこばらいをした。

そのちよつと前のことであるが、或る夜ふつと眼がさめると、いつも点いている有明行燈ありあけが消えていた。油でもきれたのかと思つて、そのまま眠ろうとしたが、どうしてか眼が冴さえてしまつて眠れない。暫くしてそつと起き、音を立てないように気をつけて手洗いにゆこうとした。……すると廊下の向うですつと襖ふすまの明く音がし、ひと言、低く誰かの囁ささやく声が聞えた。父がおたみになにか云つたのだらうと思ひ、廊下へ出ると、足音がこつちへ来た。高いれんじ窓はあるが夜中のことで、まっ暗でわからない。お孝

は用心して、

「——だあれ、おたみかえ」

と声をかけた。ぶつつかつてはいけないと思ったからだ。すると向うは気がつかなかったとみえ、よほどびつくりしたようすで、

「——私だ、……どうしたんだ」

へんにうわずった声で時三が答えた。

「あんたなの、暗くってわからなかったわ」

「——どうしたんだ、そんなところで、……なにをしているんだ」

「ばかねえ、こんな時刻になにをするわけがないじゃないの」

お孝は低く笑いながら、

「ああ気をつけてね、行燈が消えててよ」

こう云つて良人とすれ違つた。もういちどはもとの常磐津の師匠が病気だというので、四五人の稽古友達とみまいにゆくことになつた。おたみの手はなせないので、みまいの品を持って独りででかけたが、帰りにはみんな夕飯をすることになつていたら、念のため采女町の店へ寄つた。

「たぶん日本橋の花川だと思ふの、お文ちゃんもよんちゃんもいける口だから少しおそくなるかもしれないけど、……もし早かつたら榎町へちよつと顔出しして来ますからね」

良人にこう断わつていった。

師匠の家は木挽町三丁目にある。もう五十六七になる陽気な人で、腰の筋を違えたというだけの、病気とはいえない軽い故障

だった。集まった友達はみんな結婚していたし、下町で育つて下町ぐらしの、それぞれ活いきのいい者ばかりだから、いつそ花川などはやめて此こ処こで賑にぎやかにやろうということになり、たちまち受持をきめて必要準備をととのえ、正ましく賑にぎやかに酒宴を始めた。

音頭取りはお文ちゃんであった。お孝とは隣りづきあいの幼な友達で、家は佐野庄という大きな足袋屋、お孝より二年はやく婿を取つて、もう三人の子持ちだった。

——亭主なんてのさばらしちやだめ、暴れ馬を扱あうこつでやるのよ、がくつわり轡かを嚙かませてぎゆうぎゆう手綱を緊めておくの、あたしなんかぐつとも云わせやしないわ。

こんなふうに威勢がいい。女中のおたみもお文ちゃんが世話を

して呉れたものだ。……なにがさてみんな二十二三の若い世帯持ちで、いっぱし世間の味を知ったつもりでいるのだから、少し酒がはいると一座は壯觀を呈してきた。お孝もいくらか飲める口ではあるが、あまりにみんなの話が刺戟しげき的なのと、いつもより少し過したせいかまもなく氣持が悪くなり、とうていつきあいきれないと思込みをつけ、うまくごまかして独りだけ先にぬけだした。

時刻はまだ早かった。外へ出て風に当つてみるとさしたることもない、榎町へゆこうかと思つたが、それも億劫おっくうで、店へも寄らず家へ歸つた。……すると、——もともと寮ふうに造つた家で、かなりな庭にふじつぼの殻からの付いたしびの垣根をまわし、萩を編んだ折戸の小さな門があるが、——その門をはいるとすぐその、

袖垣の蔭のところの時三とおたみが立ち話をしていた。

このときはどきりとした。おたみは泣いているらしい、良人は腕組みをし、うなだれて、なにか低い声で話していた。ほんの一瞬间のことだったが、お孝は足が竦すくみそうになった、しかしそれより早く良人がこつちへ振返った。……門のあく音で気がついたのだらう、こつちへ振返って、おちついた眼つきで、

——いいから家へあがれ。

というような合図をした。そのおちついた眼つき、少しも慌てたようすのないそぶりでお孝はほつとし、黙って家へはいつたが、着替えをするときもまだ胸がどきどきしていた。

「お父つあんに叱られたんだ、おまえは知らないつもりでいるほ

うがいい」

あとから来て時三はそう云った。

伊兵衛がとこばらいをしてから、おたみのようすがどこことなく変ってきた。いつも浮かない顔をしていて、これまでついぞないことだが皿小鉢を破わつたり、腹ぐあいが悪いといつて四五日も黙って寝ていたり、また夜中にお勝手に嘔はこうとして、いやな声をだしていたりした。

そうしておたみは十月の末になって、軀の調子が悪いからと、急にひまを貰いたいと云いだし、ひきとめる手を振切るようなくあいに実家へ帰っていった。

「どうしたんでしょ、七年もいて家の者も同様にくらして来たの

に、なにが気に障ってあんなふうに出ていったのかしら」

「——急に嫁のはなしでもあつたんだらう」

時三はこう云っていた。

「——どうせ死ぬまでいる者じゃなし、いつかは出てゆくんだから、私の病気もおちついたところだしいいじゃないか」

伊兵衛もこう云うだけだった。お孝は多少にくらしいと思つたが、そのままにしておけないので、嫁にゆくゆかぬはともかく、かねて予算していただけの品物を買ひ揃え、それ相当の金も包んで、南千住の実家というのへ届けてやった。

半月ばかりして女中のはなしが出たが、子供でも生れるまでは用もないので、お孝は自分でやってゆくことにきめた。

「それにしてもへんねえ、あたし赤ちゃんが出来ない軀なのかしら」

「子供なんか急ぐことはないよ」

「だっていやなのよ、友達に会うときまってからかわれるんですもの、……あんまり仲がよすぎるんだとか、お迎えが激しすぎるんだとかって、ねえ、本当にそんなことってあるのかしら、仲がよすぎると、……あらいやだ、へんなこと云いだしちやって、あたしどうかしてるわ」

「独りではしやいで独りで赤くなったりやあ世話あねえや」

「いいじゃないの、おたみがいなくなってから初めてしみじみした気持になれたんですもの、初めて夫婦さし向いて気持なんで

すもの、これで早く赤ちゃんが出来れば申し分ないんだけど、
 ……あたしどこか信心してみようかしら」

年があけて正月の二十日に、常磐津の師匠の総ざらいがあった。
 毎年の例で、三十間堀の「半勝^{はんかつ}」という貸席でやる。当日は古
 い弟子もみんな集まって景気をつけるのだが、そこではごくたま
 にしか会えない人に会い、いろいろ情報も聞けるので、古顔は一
 種の親睦会のように心得ていた。…ここでも経済的な意味ばか
 りでなく、性来の世話やき好きでお文が采配^{さいはい}を振り、総ざらい
 が終るなり師匠を拉^{らっ}して来て、

「さあこれからお師匠さんのところあげ祝いよ」

などと氣勢をあげた。弟子たちの家からも祝いのお重や広蓋^{ひろぶた}

がたくさん届いている。そのうえ近所の仕出し屋から酒肴さけさかなを取って、去年の病気みまいどころではない、華やかで大掛りな宴会が始まった。……こんどは男もかなりまじっているので、女たちの騒ぎには限度があつたが、それだけことなく色っぽい空気がただよい、いい年のおかみさんふうの人までが気取って笑い声をたてたりした。

「お孝さん、ちよつと」

盃さかずきがまわりだしてからまもなく、お文が来て坐って、うす笑いをしながらこつちを見た。

「どうした、あんたの旦那、この頃はおとなしくしている」

お文はわざとそういう口をきく、奮闘したあとで酒がはいつて、

酔つてもいるらしい、白粉の剥はげた頬はたんきようが巴旦杏はたんきようのように赤く光つていた。

「この頃つていったつて、うちじやあいつも同じことよ、たいしたこともなしだわ」

「そんなこと云つてるからいけないんだ、あんたは旦那ほづくに惚れちやつてるんだから、ねえいいこと、夫婦であろうとなんであるうと、男と女のあいだじや惚れたほうほが負けよ、向うに惚れさせなきやだめよ、……そりやあ時さんはいいい男でしょ、あたしだつてちよいと浮気がしてみたくなるくらいだけど、だからよけい弱味を見せちやいけないの、……それをあんたはあけつ放しなんだから、あけつ放しで惚れきつてるからあんな事になるんだ、なに

よ、……相手が吉原なかとか柳橋やなぎばしあたりで、だれそれといわれる姐ねえさんならともかく、女中に亭主をとられるなんて女の恥じやないの」

お孝はあつけにとられた。お文がそんなに酔っているのかと、つい笑いながら顔を見なおした。お文はそれをどう取ったものか、ひどくいきごんで云い続けた。

「おまけにお孝さんときたら、あとから着物や、小箆こだんすなんぞ買って、お金まで付けて遣やったというじゃないの、いまに赤んぼが生れたら引取って育てるなんて云うんでしょ、あたしだったらおたみななかびりびりにひっちやぶいてやるわ、しつかりしなさいよお孝さん」

「——おたみって、おたみがなにか……」

「あたしに隠してどうするの、おたみを世話したのはあたしじゃないの、あたしお孝さんに申しわけがなくて、だからよけい肚が立って、南千住まで行ってそ云ってやったわ、……もう決して若旦那には会いません、赤ちゃんを産んだら田舎へひっこんでくらしですって、……神妙な顔で泣いてたけど、心のなかでなにを考へてるか知れたもんじゃないわ、いつも云ってるでしょ、旦那にはがっちり轡を噛ませて、手綱をぎゅうきゅう緊めていなければいけないって、……あんたは甘いから……」

お孝はもう聞いてはいなかった。軀がぐらぐらして、倒れそうな気持で、やがて激しい嘔きけにおそわれて座を立った。

五

それから五日五晩お孝は思い感った。

お文の話しぶりはずばりとしていて、思い違いではないかという隙が少しもなかった。要約するもしないも、良人とおたみがそういう仲になり、おたみがみごもったので実家へ帰った。それだけの事実をはつきり事実として語っている。南千住の家まで訪ねてゆき、そこでさんざん怒って、おたみが泣いて詫わびたという。なかでも——もう若旦那には決して会わない、という言葉は辛しんら辣らであった。それは疑いもなく二人の仲を立証する言葉だった。

——本当だろうか、……いやそんな筈はない、あのひとがおたみにそんなことをする筈がない。

そう思えば思うほど、お孝にも幾つか疑わしい記憶がよみがえってきた。有明行燈の消えていた夜のこと、袖垣の蔭で良人と二人きりでおたみが泣いていたこと、それから良人が来てからのおたみのなまめいたようすや、じつと良人を見るしおのある眼つきなど。

そうしてとうとう耐えかねて、六日めの夜になって、お孝は良人にそのことをきいた。この瞬間に自分の生き死にがきまるといふ気持であつた。

「本当のことを云つて頂戴、あたしおちついて聞くから、……ね

え、決して騒いだりなんかしないから、本当のことを聞かして頂戴」

時三は黙って自分の膝を見ていた。こころもち額が白くなったようである、それからやや暫くして、つぶや呟くように云った。

「——濟まない、勘弁して呉れ」

「いいわよ勘弁して呉れなんて、いいのよそんなこと」

お孝は慌てて笑いながら遮さへぎった。自分でもふしぎなくらい明るい笑いかたで、寧むしろうきうきした調子でさえあった。

「本当のことがわかればいいの、それで、……おたみはいつごろお産するの」

「——今年の五月だったと思うが……」

「そう、五月ね、それを聞いておかなくっちゃあ、……だって知らん顔をしているわけにはいかないでしょ、お産するとなればいろいろ、……あたしとしたって、してあげなければならぬことがあるし、……でもわかってよかったわ、あたしちつとも知らなかつたんですもの、よつぽどばかでぬけてるのね」

「——お孝、おれが悪かつた」

時三は顔をあげてお孝を見た。きれいな澄んだ眼に涙が溜たまつていた。

「——魔がさしたんだ、……まちがいだつたんだ、本当に悪かつた、勘弁して呉れ」

「いいわよ、もういいのよ、誰にだってまちがいということはある

るわ、あたしだって、……あら、お父つあんが呼んでるんじやないかしら」

お孝はあたふたとそこを立った。

良人の前ではとうとう泣かずに済んだ。恨むこともできなかつた。そしてそれから二三日は気分も明るく、ふだんと同じように笑ったり、陽気にお饒舌しゃべりをしたりした。……だが或る夜、良人が自分の夜具へ手をかけたとき、その瞬間、お孝は激烈な嘔きけを感じ、お勝手へいって、嘔こうとして、こんどはとつぜん胸をずたずたにひき裂かれるような、非常な苦悶くもんと絶望におそわれ、呻うめき声をあげてそこへ倒れた。

「お孝、どうした、どうしたんだ」

こう呼ばれて我にかえると、自分が良人に抱き起こされていた。お孝は頭を振り、笑おうとした。なんでもないので、こう云おうとして、抱いている良人の手のぬくみを肩に感じたとき、蛇にでも触ったように、総身を震わせ、叫び声をあげて良人の手をすりぬけた。

「——お孝、いつたいどうしたんだ」

「あつちへ、……あつちへいつて、……なんでもないので、あたしだいじよぶよ、……あつちへいつて」

全身の震えで揚板ががたがたと鳴った。時三は暗がりのなかでじつとこちらを見つめていたが、やがて黙ってお勝手を出ていった。

それからお孝の苦しみが始まった。その苦しきは肉躰にくたい的なもので、まず嘔おきけが起おこり、ついで胸を搾しめぎ木ぎにかけられるか、ひき裂かれでもするような気持になる。眼の前が急にまつ暗になり、息ができなくなり、そのまま気が狂ってしまいそうな感じにおそわれる。

「——ああ、……ひどい、……あんまりひどい」

肩で喘あえぎながら呟つぶやいて、身もだえをして、誰にも見られないところへいつて泣く。

「——なによ、このくらい、ざらにあるこつちやないの、平気じゃないの」

泣きながらこんなことも云ってみる、しかしそう云いながらま

た身をもだえ、転げまわって、絶叫したいような衝動に駆られるのであった。

その日は朝から南風が吹いて、気持の悪いほど暖かかったが、風がおちてからも気温が高く、花でも咲きそうな陽気だった。このところまた胃の調子がいけないらしく、沈んだ顔色をしていた父が、その夜は気分がいとみえて、夕食のときには久しぶりに釣りの話などした。

「こんな晩はあなごがくうんだがな、……しかし海ばかりやって来たから、今年はひとつ鮒ふなをやってみようかと思う、……榎町じやあ慥たしかそのほうの天狗てんぐだったな」

「親父のは口ばかりですよ、釣りにゆくんじやなくって酒を飲み

にゆくんですから」

「いや釣ったものをそこで作って飲むのが釣りの本味ほんあじだとい
くらいなんだ、私は飲めないからだめだが……」

お孝は二人の話を聞きながら、寒橋の夜の河岸かしを思いだしてい
た。

父が寝て、良人が寝てから、暫く解き物をしていたお孝は、ふ
いと誰かに呼ばれるような気持で、膝の物を押しやって立ち、音
を忍ばせて裏口から外へぬけだした。……十一時ごろだろう、近
所は戸を閉めて寝ていたが、ところどころ灯がもれ、楽しそうな
話し声の聞える家もあった。まっすぐに河岸へぬけ、寒橋の、い
つも父の坐る崩れた石垣のところへたたずいって佇んだ。

川上の佃島つくだじまのほうに、舟で燃す火がぼつと霞かすんで、点々と五つ六つ見えた。白魚網しらうおあみだろう、そのあたりから水面を伝つて、人の声がとぎれとぎれに聞えて来る。

「——おつ母さん」

お孝はそつと呼んだ。父親がそこに釣糸を垂れている、母が女中に茶や弁当を持たせて来て、父のそばへいつて跼む。

——来なくつてもいいのに、風邪でもひいたら困るじゃないか。

——でも寂しくつて、……寝られなかったから来てみたのよ、お茶をあがったら。

——濟まないな、ちようど欲しいところだった、おまえそうしているならこれをちよつとひっかけているがいい。

——あらいいのよ、それじゃああんたが寒いわ。

父と母とのこんな会話が、現にそこでとり交わされているように、ありありと聞える気がした。父と母との穏やかな、まじりけのない温かな愛情、お互いに助けあい相手に誠実であつた愛情、……それがそのまま、寒橋の岸のその石のところに、そのまま現に残っている、二人の愛情は今でもそこに生きている、そこに、その石の上に、……お孝にはそれが眼に見えるように思えた。

「——おつ母さん、あたし苦しいの、生きているのが辛いよ、ねえ、……おつ母さん、あたしどうしたらいいの」

お孝は暗い水を覗き^{のぞ}こんで云つた。

「——こんなに苦しいのに、あのひとが憎めない、憎いんだけれ

ど離れられない、まえよりもあのひとが恋しくって、それでそばへ寄られると鳥肌の立つほどいやで、……独りになると死ぬほど苦しくなるの、ねえ、どうしたらいいの、教えて、おつ母さん、ねえ、あたしどうしたらいいの」

たぶたと岸を打つ波の中から、母の顔がすつと浮きあがり、手招きをしながらこう云った。

「——おいで、お孝、こつちへ、おつ母さんのほうへおいで……」
お孝はぞつと総毛立った。あまりにはつきり聞えたからである。そして後ろへさがろうと思いつながら、ふらふらと逆に足が前へ出たとき、強い力で激しく肩を抱き締められた。

「ばかなまねをするな、お孝」

耳もとでこう叫ばれ、はつとして、身をもがいてその手を振放した。

「なによ、なにがばかなことよ」

お孝は髪へ手をやりながら云った。

「むしむしして頭が痛いから、ちよつと川風に当りに来たんじゃないの」

「——お孝……」

時三は大きく喘ぎながら、ごくつと唾をのみ、片手を妙なぐあいに振って、それからしやがれたような声で云った。

「すぐ帰って呉れ、お父つあんが悪くなつたんだ、おれはこれから医者へ行って来る」

「——お父つあんが、どうしたんですって」

「また血を吐いたんだ、まえよりたくさん吐いた、すぐ帰って、濡れ手拭で胃のところを冷やしていて呉れ、医者を呼んで来るから」

「——お父つあんが」

こう云いながらお孝はもう駆けだしていた。

良人がなにか叫んだようだった。けれどもお孝はなかば夢中で走り、家へ着くまでに二度も転んで、片方の膝をひどく擦剥すりむいた。……父は仰向けに寝て。胸の下まで夜具を捲まくつて、枕から頭を外していた。顔はきみの悪いほど蒼あおく、頬がこけ、汚れた口をあけて、急速な浅い呼吸をしている。拭くひまもなかったのだろう、

そのあたりはまだ汚れたままだった。お孝はできるだけおちついた動作で枕もとへいった。

「お父つあんどう、……苦しい、いまうちでお医者へいったからすぐ来るわ、少しの辛抱だからしつかりしててね」

「——大丈夫だ、もう苦しくはない」

伊兵衛は眼だけをこちらへ向けた。

「——それよりお孝、おまえに話がある、もつとこつちへ寄つて呉れ」

六

「だつていま話なんかしちやだめよ、お医者の方来るまで静かにしていなくつちや」

「いや聞いて呉れ、いま話さなくつちやあ話するときがないんだ、……私は、お孝、……おまえにも済まない、時三にも済まない、……いいか、うちあけて云うが、お孝、……おたみが産むのは私の子なんだ、時三のじゃあない、おたみはこの伊兵衛の子を産むんだ」

ああとお孝は息をのんだ。

「時三は私を庇かばつて呉れた、親の恥を身に衣きて呉れたんだ、おたみにもそう云い含めたらしい、……おまえにも決して云うなど、あれは私にそう約束させた、……だから黙っていたんだ、けれど、

もうこんどは私もいけないという気がする、このままでは死ねないからうちあげたんだ、お孝、……わかったか」

「——お父つあん」

お孝はとつぜん父の手を握り、その手に頬ずりをしながら泣きだした。

「——うれしい、お父つあん、うれしいわ、あたしうれしい」

そしてまるで笑うような声で遠慮もなく泣いた。伊兵衛は眼をつぶって、そつと頷うなずきながら云った。

「おまえが苦しんでいることは、私はよく知っていた、……さぞ辛かったろう、身も世もない思いだったろう、……だが事情がわかってみれば、私のあやまちだということがわかれば、もうその

苦しきもなくなる筈だ」

お孝はまだ泣きながら、自分の涙で濡らした父の手の上で頷いた。

「人間は弱いもんだ、気をつけていても、ひよつと隙があれば、自分で呆れるようなまちがいをしでかす、……だれかれと限らない、人間にはみんなそういう弱いところがあるんだ、……ここをよく覚えておいて呉れ、いいか、……そんなこともあるまいが、長いあいだには、時三も浮気ぐらいするかもしれない、……そのときは堪忍してやれ、夫婦のあいだのまちがいは、お互いに堪忍しあい、お互いに助け、助けあつてゆかなくちやならない、それが夫婦というものなんだよ」

父の言葉をはつきり聞きとめようとしながら、お孝はもう幸福とよろこびで頭がいっぱいになり、軀が溶けるような思いで泣き続けた。

「——約束だから、この話は、おまえの胸ひとつにしまっておいて呉れ、……みんながそのつもりでいるんだから、時三にも云っちゃあいけない、わかったな」

伊兵衛はこう念を押して口をつぐんだ。

それからほんの僅かして医者 came。けれども手当てにかかると暇もなく、また大量な吐血があり、昏睡こんすい状態になって、日本橋らんぼういのほうの蘭方医を呼ぼうと、使いを出してまもなく、伊兵衛は昏睡したままついに息をひきとった。

さんしちにち

三七日が済むまでは、お孝は身も心も自分のものようではなかった。時三が心配して、坐つていれればいい、なにもするなど庇つて呉れ、じっさいまたそう働くこともなかった。それでいて絶えず追いたてられるように、そわそわとおちつかず、夜も熟睡することができなかつた。

「そんなことはないよ、ゆうべなんかいびきをかいて眠つてたぜ、私が二度も起きたの知らないだろう」

良人はそう云つて笑つたが、自分ではそうは思えない、慥かに一晩じゆう眠れなかつたようで、昼になると疲れて眠くてしかたがなかつた。

三七日には寺で法事をしたあと、金六町の「菊屋」で客に接待

をした。みんなで三十人ばかりだったが、諸事たなうちの者が奔走するので、お孝は坐つて挨拶だけしていればよかつた。……接待が済んで、いちど店へ寄り、小田原町へ帰る頃にはすっかり昏れて、家にはあかあかと灯がはいつていた。

留守番の者もかえし、二人だけになつて、ほつと息をついて顔を見合せたとき、お孝は媚こびのある眼で良人に頬笑んだ。

「たいへんだつたわね、疲れたでしよ、なにもかもあんた一人にして貰つて、……本当に悪かつたわ、……ごめんなさいね」

「自分の親のことじゃないか、おまえに礼を云われることはないさ」

「お父つあんうれしかつたと思うわ、なんにも心残りはないし、

こんなにして貰って、生みの子にだって出来ないことをして貰って、本当に安楽に死ねたと思うの」

「そんなことがあるもんか」

怒ったようにこう云って、時三はふと脇へ眼をそらした。二十日あまりの心労が出たものだろう、頬が少しこけて顔色も悪い。彼はいったん脇へそらした眼を伏せ、湿ったような低い声で呟いた。

「私は心配のかけっ放しだった、これから少しは孝行のまねごともしようと思っていたんだ、……いま死なれちゃあどうしたって気持ちが済まない、おれは諦めあきらきれないんだ」

「いいえそうじゃない、あたしみんな知ってるの、お父つあんは

あんたにお礼を云ってるわ、あたしだってどんなにうれしいかわからない、うれしくって、……どうお礼を云っていいかわからないわ」

お孝は襦袢じゆばんの袖でそつと眼を押えた。時三は不審そうにこつちを見て、まるで傷口にでも触れるように云った。

「——みんな知ってるって、……いつたい、なにを知ってるんだ」
「おたみの産む子が誰の子だかっていうこと、あの晩あんたがお医者へいったあとですつかり話して呉れたの、あんたがお父つあんの恥を身に衣て、自分のまちがいのようにとりつくろって、おたみにまでそう云い含めて呉れたということをや、……あたしばかりだから、そうとは気がつかずにあんたを怨うらんだわ、苦しうって

悲しくつて、……生きてるのが辛かったわ、……だからうれしかった、うれしくつて、あんまりうれしくつて、……もういつ死んでもいいと思つたわ」

「——お父つあんが、そう云つたのか、お父つあんが、おたみの産む子は、……お父つあんの子だつて」

「あんた、堪忍して」

お孝は良人の胸にしがみついて、ふるえながら頬を良人の胸にすりつけた。

「あたし自分のことしか考えなかった。可愛がられることばかり思つて、あんたの身になつてみる気がなかったの、お父つあんがそ云つたわ、……人間は弱いもんだつて、夫婦はお互いに許しあ

い、ぬり助けあつてゆくもんだつて、……あたしようやく大人になつたような気がするの、おたみのことがもしあんたのまちがいだつたとしても、こんどは、その半分はあたしの責任だと思うことができるわ、ねえ、……あたしこれからいい妻になつてよ、だから堪忍して、……これまでのことは堪忍して頂戴」

そうして甘く噎^{むせ}びあげるお孝を、時三は黙つて抱き緊め、その頬へ自分の頬を押しつけた。涙に濡れて火のように熱い頬である、時三は眼をつむり、抱いた妻の軀を、子供でもあやすように、静かに揺すつた。

「おたみが子を産んだら、うちへ引取つて育てさせてね、……あんなには済まないけれど、あんなの子にして、……そうすれば、

貰い子をすれば、子供が出来るというから、あたしにも赤ちゃんが出来るかもしれないわ」

「——もしおたみが放したらな」

「おたみはこれから嫁にゆく軀ですもの、わけを云えば放すわよ……ふふ」

お孝は泣き声で含み笑いをした。

「お文ちゃんかむくれるわね、いつか云ってたとおりになるんだもの、……あんたはいまにその赤んぼも引取るっていうんでしょ、……これだけは本当のこと云えないんだから、あのひとときとまつ赤になつて怒るわよ」

その晩は絶えて久しく、そして二人がいつしよになつてから初

めて、夜具は一つしか敷かれなかった。……桃の節句も近いというのに、春寒というのだろう、珍しく冷える夜で、火の番の柝きの音が遠く冴えて聞えた。

夜半をずっと過ぎてから、時三がそつと起きて来て、物音を忍ばせて仏壇の前へゆき、そこへきちんと坐つて、頭を垂れた。

「——有難う、お父つあん」

彼は低い声でこう囁いた。

「——もうこれつきりです、決してもうあんなことはしません、見ていて下さい、……私はきつとお孝を仕合せにします」

彼は腕で眼を掩おおつた。咽むせび泣きの声が彼の喉のどについてもれた。ずつと遠くで、火の番の柝の音が冴えて聞えた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二十二巻 契りきぬ・落ち梅記」新潮社

1983（昭和58）年4月25日発行

初出：「キング」大日本雄辯會講談社

1950（昭和25）年2月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寒橋

山本周五郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>